# 私が携わった情報システム開発プロジェクトについて

## プロジェクトの特徴

損害保険会社Ａ社はインターネットでの自動車保険や傷害保険などを販売している。市場のがんや先進医療に対する補償のニーズにこたえるため、このたび医療保険に新たに商品を増やすことになった。その際に今後の市場のニーズに迅速に対応できるように、汎用機で構築された現行の医療保険向けシステム（以降、旧システム）を、オープン系のＷｅｂシステムとして再構築することとなった。Ａ社は全国に数百件の代理店をもち、各代理店は新しいＷｅｂシステムを利用して、保険の申し込みの登録や、情報変更などを行う。本開発の総開発工数は約１５０人月、開発費用は約１．２億円である。工期は１年間。約８ヶ月で製造、結合テストを終え、続く４ヶ月で総合テスト、運用テストを行う。以上を踏まえ、当医療保険再構築プロジェクトを情報システム開発会社であるＢ社とＣ社が受注した。Ｂ社は新システムの基幹部分を構築し、Ｃ社はＥＴＬやワークフローなどの新システムの周辺システムを構築する。私はＢ社の社員であり、本案件のプロジェクトマネージャに任命された。

## プロジェクト実行中に察知したプロジェクト目標の達成を阻害するようなリスクにつながる兆候

設計が完了し、製造フェーズにて私は以下の兆候を察知した。一つ目は製造を担当している担当者の稼働時間が計画に対して大幅に増加していること。二つ目は詳細設計書に記述が分かりづらく、製造に落としにくいとの意見があがっていた。

# リスクへの対応について

プロジェクトマネージャは、情報システム開発プロジェクトの実行中、プロジェクト目標の達成を阻害するリスクにつながる兆候を早期に察知し、適切に対応することによってプロジェクト目標を達成することが求められる。

## 兆候をそのままにした場合に顕在化すると考えたリスクとそのように考えた理由

前述の兆候をそのままにした場合、納期を守れなくなるリスクが顕在すると考えた。なぜなら開発生産性が低下することにより、スケジュールが遅延する可能性があるからである。または無理にスケジュールを守り納期に間に合わせた場合、成果物の品質が悪化するリスクが顕在化する可能性もある。

## 対応が必要と判断したリスクへの予防処置

前述の察知した兆候の原因を分析し、リスクの発生確率や影響度などをリスク評価マトリックスにまとめ分析した結果、製造工程の生産性を向上されるために以下の予防処置が必要であると判断した。

1. 製造工程の生産性を向上させるため、製造が未着手の機能について詳細設計を実施した担当者にプログラム設計までを担当させ、これを元に製造を行うようにする。
2. 別途要員をアサインし、単体テスト項目を先行して作成させ、製造ができた機能から試験を実施させる。

## リスク顕在化に備えて策定した対応計画

リスク予防措置を実施しつつも、リスクが顕在化してしまった場合に備え、以下の対応計画を考えた。

1. 計画上の納期までにすべての機能が開発できないことを想定し、部分リリースを行うことを計画した。このための顧客との調整、製造する機能に優先順位をつけ、優先度の高い機能から順番に製造し、部分リリースとなった際の準備を行った。
2. 製造したプログラムの品質が低下することを想定し、結合試験以降から参画するテストチームの体制を強化し、テスト工程で品質を強化することを計画した。

# 取組み結果と今後について

## リスクへの予防処置と評価

上述の対策により、生産性が向上し、大きな進捗遅れを未然に防ぐことができたため、おおむね成功したと考えている。対策①が有効であり、プログラム設計まで実施した機能については生産性が十分上がるとともに、品質も向上し、開発全体として納期遅延を防げたため十分な効果があったと考えている。

## 今後の改善点

対策実施のためコストが増加し、リスク費用をほとんど使い切る結果となった。対策②について次回からは、ソースコードや設計書から単体試験項目を自動生成するなどの工夫を施し、コスト抑制のための改善を実施する。

以上